



Title	中国系ニューカマー生徒の日本の学校文化への適応に関する考察：生徒の能動性と適応促進要因に着目して
Author(s)	潘，英峰
Citation	大阪大学言語文化学. 2011, 20, p. 63-74
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77794
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国系ニューカマー生徒の日本の学校文化への適応に関する考察

—生徒の能動性と適応促進要因に着目して—*

潘 英峰**

キーワード：中国系ニューカマー生徒、学校文化への適応、M-GTA

This study aims to explore the types of accelerated adaptation used by newcomer students facing Japanese school culture. To better understand this issue, the author conducted an investigation at public middle schools in the Kansai area from April, 2009 to March, 2010. The subjects of the investigation were 3 Chinese newcomer students enrolled at a middle school for less than 2 years since their arrival in Japan. The investigation combined participant observation, semi-structured interviewing, and description-type questionnaires. M-GTA technique was used to analyze the field research data.

In the investigation, though I observed maladjustment in the newcomer students and the “totalitarianism” (issei kyōdōtai shugi) in Japanese school culture cited in previous research, my target group did not idly sit in a state of maladjustment and conflict forever. Through observation I found that after experiencing the rigidity of personal relations in Japan, one newcomer student appeared conflicted when it came to adopting a receptive attitude and integrating with his class. Meanwhile, he recognized the significance of participating in club life, even though it is very different from Chinese school culture, and actively grappled with this revelation. The other two students were seen to move slowly away from regular class and towards “their zone” – the Japanese language classroom. They also recognized the differences between Japanese and Chinese school culture and sought help from minority friends. All of these brought various aspects of the newcomer students’ school life into relief and shed light on the process by which, while still being conflicted, they turned towards adaptation and receptiveness.

From the standpoint of newcomer students’ agency, if we break down the factors that stimulate adaptation we notice four items, ordered as follows: (1) Participating continuously in club/group activities, (2) Acquisition of personalized strategies, (3) Collaboration with minority partners and peers who share the same experience, (4) Recognition of a receptive manner in their personal relations. In conclusion, research data indicated that newcomer students had developed personalized strategies, not only for survival of school life, but also for the creation of optimal conditions for quality of life.

* Examining Adaptation by Chinese Newcomer Students to Japanese School Culture:
Focused on Student Agency in Adaptation Promoting Strategies

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

1 はじめに

1990 年の「出入国管理及び難民認定法」改正により、日本に居住するニューカマー¹の数が急激に増えている。社会の変化に伴って学校でも多国籍、多文化、多言語の児童・生徒が急激に増加しつつある。2008 年 9 月 1 日現在、日本語指導が必要な外国人児童生徒数は、28,575 人²であり、その内中学生の増加の割合が 26.7%で、最も高い。思春期にある外国人の児童生徒にとっては日本の学校が生活の中心的な場にならざるを得ない。そのような状況の下で彼らは常に、如何に学校生活を過せばいいのかという周りの環境への文化的適応の問題に直面している。また、学校現場も同様に、彼らに対する適応支援のあり方が彼らの学校生活全体への参加の度合いを左右するという課題を抱えている。そこで、本研究では関西の公立中学校に在籍している中国系ニューカマー生徒 3 人を対象に、日本の学校文化と葛藤するニューカマー生徒のその文化についての受容・適応へのプロセスを明らかにし、彼らの学校文化への適応を促す要因を探る。

2 先行研究

2.1 本研究の基本概念

本節では、本研究に関わる 2 つの基本概念である適応と学校文化について検討する。

2.1.1 適応

学校適応過程と異文化適応に関する先行研究において、小泉（1986:289）は、Wapner らの有機体発達論的システム論的アプローチを参考にし、適応の過程を定義した。即ち、人間—環境システムの変化は主体と環境との調整過程ということができ、それは適応の過程だと考えられると指摘する。江淵（1986:911）によると、適応とは「個体が生存するために環境を可能な限り改変したり、逆に環境に適合するように自分の方を変えたりする自己調整の過程」である。これらの主張は「主体と環境という概念を前提とし、そのプロセスを強調している点」で共通している。本論文でも主体（ニューカマー生徒）と環境（新しい就学環境である日本の中学校）を 1 つのシステムと捉え、適応をニューカマー生徒と周囲の環境との自己調整的プロセスとして捉える。

2.1.2 学校文化

学校文化研究への焦点の移行は、欧米では 1970 年前後から顕著になり、日本でも 1980 年頃を境にして、学校研究から学校文化研究への地すべりのような転換が起こった。久富（1996:10）によれば、「学校文化とは学校に集う人々の行動や関係のある独特の《型》へ向けて人びとを形成する日常的な動きの存在」とであると定義するが、本論文では日中学校

¹ 本稿では、ニューカマーのうち、中国にルーツを有する者を中国系ニューカマーと総称する。彼らの来日の経緯には、中国帰国者、親の就労、国際結婚などがあり、中国国籍保有者のみならず日本国籍取得者もその定義に含める。この中で特に、本研究は日本語初級レベルで来日 2 年以内の中国系ニューカマー生徒を対象とする。

² 「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査（平成 20 年度）」については文部科学省ホームページを参照（2010 年 6 月 10 日アクセス）。

文化³の比較という観点から、学校文化を下記の5つの要素⁴を構成要素として形成されるものと規定した。

- (1)学校を取り巻く環境：学校が直面する現実にとどのように対処するのか、どのようなことを行う必要があるかは、直面する現実を直視することで分かる。そして、この必要性によって学校文化の内容が影響を受けることになる。
- (2)教育理念：学校のあるべきビジョンを指す教育方針、校則も含まれる。
- (3)モデルパーソン：(2)の価値を体現した校内の人物であり、学校の構成員にとっての理想のモデルである。教育理念の体現者が学校文化作りには必要である。
- (4)儀礼と活動：校内で組織的かつ定期的に行われる活動のことであり、これを通じて教育理念とそれに基づく一定の行動様式を反復的に学習、浸透させる。
- (5)歴史・コミュニケーションネットワーク：(2)の教育理念と(3)のモデルパーソンの活動に関する口コミ等の活用や地域活動への参画などによって、教育理念を学校全体に定着させる。

2.2 本稿の視点

ニューカマー生徒の受け入れ初期の段階に関しては、彼らを多く受け入れた地域あるいは彼らに対する教育に先進的に取り組んできた地域を中心に多くの実態報告の発表が行われた。そして、ニューカマー生徒の学校への不適応をめぐって調査研究を行った上で、それらの研究は、日本の学校文化は「境界化」(佐藤、1998:484)、「一斉共同体主義」(太田、2000:223)などの特性を備えていると結論付けた。上記の結論に対して児島(2006)と森田(2007)はニューカマー生徒の適応様式に多様性が生じていないかについて疑問を投げかけ、日本の学校文化のポジティブな側面の存在とニューカマー生徒達の能動性に注目して新たな視点から研究を行った。

児島(2006)は、ニューカマー生徒が学校の中で周辺化されがちなのは確かだとしても、そのことによって必ずしも佐藤(1998)が強調する「境界化」に行き着くとはかぎらないと論じた。氏は日系ブラジル人生徒を例に、彼らは厳しい状況の中でもただ受動的に生きているのではなく、むしろ主体的に生き抜いているという視点に立って彼らの置かれた現実を解釈することで、ニューカマー生徒達がみせる「抵抗的な適応」のプロセスを明らかにしている。森田(2007)は、ブラジル人児童が通うある小学校を対象としたエスノグラフィーを表し、日本の小学校における多元的共存主義の可能性を示唆している。森田が対象とした小学校においては、日本の共同体主義的な教育がブラジル人生徒の学校適応にプラスに作用していたと説明する。また、棚田(2009)では、児島(2006)と森田(2007)の

³ 本稿で言及する日本の学校文化は調査対象校であるT中学校の学校文化であり、言及する中国の学校文化は調査対象者達が経験した中国での出身校の学校文化を指す。

⁴ ①～⑤の構成要素は久富の定義を踏まえ、佐藤・山田(2004:52-54)の組織文化の諸要素を参考にして作成したものである。組織文化の要素は①儀礼、②遊び、③表象、④共有価値、⑤無自覚的前提である。

マイノリティとして扱われた当事者自身の話りの視点を参照して、日本の学校文化のポジティブな側面をニューカマー生徒の話りを通して明らかにしている。

先行研究は各々意義ある結果を提示しているが、(1)調査対象・地域の偏り、(2)ニューカマー生徒自身の見解の欠如、(3)ニューカマー生徒が日本の学校文化の肯定的な側面を経験するプロセスに関する記述の不足、などの問題点を有している。そこで、本研究は上記の欠点を克服するため、フィールドに入り、ニューカマー生徒の能動性と彼らによる学校経験の解釈に注目し、日本の学校文化のポジティブな側面も考慮に入れ、彼らにおいて学校文化への適応を促す要因の検討を試みた。

3 調査の概要

調査対象は関西のT中学校に在籍する来日2年以内の中国系ニューカマー生徒3名張宇(2年生)、劉小研(3年生)、劉小明(3年生)(いずれも仮名。後ろの2名は兄弟)である。彼らは学校内において主に在籍学級と日本語学級とクラブという3つの場所で活動する。フィールド調査は2009年4月から2010年3月までの1年間に渡って参与観察、面接、記述式アンケート調査などの手法を用いながら実施した。週1-2回学校に赴き、日本語教師の補助をしながら観察活動に従事してその様子を記録した。それと並行して校長、外国人生徒の担任教諭、クラブの先生、日本語教師、ニューカマー生徒へのインタビュー調査を随時に実施した。インタビューは録音し、文字起こしを行った。

分析には修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を使用した。M-GTAの特性は、「データ収集におけるインターラクティブ性、調査者とデータの間でのインターラクティブ性、分析結果を現実場面に応じて実践に活かすというインターラクティブ性の3つであり、安定的に統合された研究方法」(山下、2007:31-32)である。本研究では、M-GTAが強調するインターラクティブ性を重視し、調査対象者との交流を随時に行いながら調査を進めた。分析は二段階に分けて行った。第一段階では、初期段階の日常語によるコーディングを行ってそれを読み返し、再コード化を重ねていく作業を繰り返した。第二段階では、注目される出来事に焦点をあて、抽象度の高い言葉を使用して再コード化を試み、結果をカテゴリー化した。一例として、生徒たちの学習の様子を記した「自らの判断による教科学習外の問題の克服」「学習、活動の場が日本語教室への移動」のコーディングを行った後、「自分なりの適応術の選択」とカテゴリー化したものが挙げられる。

次節では、フィールドで観察した事例とインタビューデータを適宜に提示しながら、ニューカマー生徒の学校文化への適応促進要因を考察する。

4 ニューカマー生徒の能動性と学校文化への適応促進要因

4.1 学校文化との葛藤の中での適応術の選択

初来日のニューカマー生徒は日本語能力の問題に直面している。彼らにとって、授業の内容が分からないというのは当然であるが、分かる、分からないに関わらず、教室で授業

を受け、椅子に座っていなければならないのは学校生活の基本である。彼らの授業中の様子はどうかであろう。まず、張宇の事例を提示する。

事例 1 (2009/7/6) (【】は調査者の発話、「」は対象者の発話)

授業の初め、張宇は黒板の書き込みをまじめにノートに記入したが、15 分ほど過ぎた辺りから日本語教室で習う教材を出して単語を暗記し始めた。授業の後半から張宇は周囲の日本人生徒と小声で話したりした。授業が終わった後、張宇に話を聞いた。【授業の内容がどれくらい分かるの?】「うん、20%くらい。武士や、戦争など漢字を見たら分かる。ノートを書き終えた後、ほとんどこの本(『標準日本語』)を読んだ。」

張宇は授業中の戦略として漢字に対する既存の知識を利用して授業内容を理解する努力をする一方で、授業と関係のない教科書を読むなどの行為をして理解力の落ちる授業の時間を過ごしていた。張宇の教科学習状況について「日本史はまったく分からない状態で、国語の勉強も苦手みたいです。」と張宇の担任の先生は語った(張宇の担任の先生へのインタビュー、2009/10/20)。

主に数学や物理で用いられるような社会や文化の壁を越えて理解が可能な学習言語は、より通文化的な普遍性を有する一方、国語や社会で頻繁に用いられる文学、神話などに由来する意味を含んだ言葉、即ち歴史・社会・文化的営みに関わる言語は、出身文化の違いをより直接的に提示する。日中両国は同じ漢字文化圏に属するとはいえ、中国で小学校教育を受けた張宇のようなニューカマー生徒達の出身文化と日本の歴史や文化との根本的な違いが学習言語に対する理解の差を生み出すため、彼らは「国語と社会が分からない」という問題に苦労している。

刘小明は中国で中3の授業を半年ほど受けた経験を持つため、英語の授業は少し余裕があるように見える。クラスの他の生徒と同様に先生の指示通りに練習問題を解いたり、自習したりできる。それにもかかわらず、学習意欲を見せずに授業時間を過ごしている様子が授業観察時に見られた。

事例 2 (2009/7/6)

英語の先生:「CD を聞いてから先生と一緒に単語を読みましょう。Once, yet。」

しかし、刘小明は英語の先生や他の日本人生徒と一緒に英語の単語を声に出して読んでいなかった。【どうして一緒に読まないの?】「読むなんて、今日先生(筆者のこと)が来たからクラスメートは英語の先生と一緒に読んだけど、普段は誰も声を出さない。先生1人で読む。もし、私が声を出したら、きっとみんなに見られるだろう!」結局、最後まで全く読まなかった。

既に来日半年の刘小明にとって、英語の授業は中国の中学校で習った内容であるため先生が話している日本語は分からないが、国語、社会の授業より理解しやすいものだという。しかしながら、英語の先生について単語を読まなかったり、ビンゴゲームに当たったが景品をもらいに行かなかったりしている。ここで、特に注目すべき点は、日本語教室での日本語の授業中において刘兄弟の違う側面が観察されたことである。筆者は日本語教室で日本語教師の補助として兄弟2人に日本語を教えている。筆者が説明した日本語の文法を理解することも速く、残った宿題も真剣にやってくる。また、日本語を教えられる際に、しばしば筆者に質問する。

事例3 (2009/10/6)

『標準日本語』第26課の単語を説明した後、【何か質問がある？】と刘小研に聞いた。すると、彼は①「先生、『めっちゃ』ってどんな意味ですか?」、②「『楽しみ』は形容詞プラス『み』で名詞になるが、他の形容詞『高い』とかも同じように変化しますか?」と質問した。『標準日本語』(上)の勉強が終わった後、日本語能力4級のテストをしてみた。僅かしか間違わなかった。間違った原因も納得できるまで確認した。

刘小研の学校での様子について、担任の先生は「笑顔を絶やさず、周りの様子をみて行動する」と語っているが、彼の学校生活への適応上の課題として「もっとクラスの子に話しかけ、昼食を一緒に食べる⁵」ことが必要だと述べた。担任の先生の語りからも分かるように彼らはことばが通じない中で、授業中はお客さん状態で過ごして周囲とのやりとりはとりあえず笑顔で乗り切っている。日本語でのコミュニケーション能力不足により周囲の日本人の先生や生徒と接触することがおっくうになり、教室で孤立する結果になっているといえる。このような状況下において、彼らは自ら主な校内活動領域を在籍学級から日本語教室へ移行させることで中学校生活への適応の方式を自らの意思で選択していることを窺い知ることができる。

4.2 学校文化の受容への変容

4.2.1 人間関係をめぐって

ニューカマー生徒達は日本の中学校生活において、日常生活言語、学習思考言語としての日本語や教科学習だけに悪戦苦闘しているのではない。同世代の日本人生徒との人間関係構築の厳しさをその身をもって経験している生徒も多い。「日本語が上達するにつれ人間関係がうまくいく」という考えもあるが、現実ではそうでもないようである。本調査においても「人間関係がうまくいかない」、「友達ができにくい」などの声がよく聞かれた。

⁵ 刘小研の担任の先生に対する記述式アンケート調査。2009年10月17日実施。

下記のインタビューデータは張宇の同級生との人間関係が円滑に進まないという経験に対する語りである。

インタビューデータ 1 (2009/7/23)

「1年の最後もう私のことを誰も相手にしてくれなかった。最初2人の生徒が私をばかにして、結局我慢できなくなってクラスにも戻らなくなってしまった。」【教室に行つて授業を受けることをやめてしまったの?】「受けない。とにかく、ここに(日本語教室)いた。1年の時1人でお昼を食べた。そのときすごくショックで、衝撃を受けた。そんな生活もう2度と過ごしたくない。」

日本の学校文化は「異なる文化、言語、肌の色、生活習慣を有する子ども達を学校から排除する要素ももっている。異質性に寛容でない日本の学校文化と、そのもとでの子ども達同士の相互行為のありようは、子ども達を、日本の学校からはじきだす力をもっている」(竹ノ下、2005: 127)と指摘される。このような状況下での中国系ニューカマー生徒の日本人生徒との人間関係づくりの難しさは「日本と中国の考え方の違いはあると思います。最初何も分からないときは、お客さん。慣れるにしたがつて、人間関係がもうことば関係なく、直接きますから。」と日本語教師が語るように日中の文化習慣や行動様式の差異の観点から説明できる(日本語教師へのインタビュー、2009/11/16)。しかし、張宇は人間関係の厳しさを経験した後、人間関係をより重要視しだし、自分なりの戦略を用いてクラスの日本人生徒との人間関係を円滑に進めて行っている事例も観察された。

事例 4 (2009/4/23)

日本人生徒が日本語教室に来るとき、中国の伝統的な道具(将棋、コマ回りなど)で遊びながら、“チョウ、チョウ”って日本語のカタカナの発音で張宇を呼んでいる。日本語教室に来る日本人生徒が全部張宇の知り合いだそうだ。

日本人生徒との人間関係を円滑に進めるため、具体的にどういった戦略を取ったのかを張宇に対するインタビューデータを通して考察する。

インタビューデータ 2 (2009/7/23)

【どのような方法で友達ができた?】「朝から晩まで一緒に遊んであげる。話しかけたり、笑わせたりする。(略)仲良くなないとクラスにいられないから。せめて心を打ち明けることができたなら日本人と交流できるようになるので、一緒に遊べる。しかも、現在の私は心が開放的になったよ。」

フィッシャーとブラウン(1989)は自分1人からでも人間関係を変えることは十分可能であるとしている。彼らの考え方は、もし片方が変わるなら、相手も変わるということである。また、彼らは人間関係を改善するために実行すべき詳細なアドバイス⁶を提供している。そのうちの1つは、つき合う相手の態度が受容的か否かにかかわらず、受容的な態度を取るということである。この思想を張宇は体現している。張宇は周囲の日本人生徒との人間関係を円滑にするため、自分なりの戦略を用いて在籍学級に溶け込もうと努力している。「せめて心を打ち明けることができれば日本人と交流できるようになるので、一緒に遊べる」という思考とフィッシャーとブラウンの提示した受容的な態度を取るというアドバイスとの間に類似性がみられる。つまり、この受容的な態度が張宇にとって、周囲の人間関係を円滑にすることができるかどうかを決める重要な要因だということである。受容的な態度を示し、個より集団が重要であることも認識するようになったからこそ、自分の世界観を変えつつ在籍学級での人間関係を円滑に進めることができたと言える。

このように授業を含めさまざまな異文化体験場面でもまれる経験を重ねると、どの文化の一部でもなく、また、どの文化からも全く離れているわけでもない従来と異なる文化的アイデンティティを育み、自分で柔軟に判断して自分らしさを保ちつつ、どの文化でもやっていける強い自我アイデンティティが育つのではないだろうか。張宇の事例は思春期に異文化体験をすることの意義を物語っている。したがって、ニューカマー生徒にとって中国人としてのアイデンティティを保ちつつ、日本文化、日本人という周囲の違いも認めて受け取ることが極めて重要なことであると言えるだろう。

4.2.2 カリキュラムをめぐって

中国の学校では、折り紙やオリジナルアルバムなどの製作の機会が大変少ない。特に中学校3年生になったら、すべての時間を英・数・国など受験に必要な教科に使うため、美術も音楽の授業も受験教科の授業に振り替えられてしまう。日本の学校では、主要教科以外の科目も勉強の1つの内容として取り扱い、重要視されている。しかも、日本の高校進学受験では、単にテストで成績を評価するだけではなく、日常の体育、美術、音楽などの総合成績も相当な割合を占めている。この点が、中国の学校制度と大いに違うところであるといえる。本調査では、日中両国の学校制度のカリキュラムの違いで生じた日本の中学校への不適応の事例がみられた。

⁶ フィッシャーとブラウン(1989)は人間関係を改善するために実行すべき詳細なアドバイスを全部で6つあげた。本文で言及したアドバイス以外に、①相手がどのような態度を取っても合理的な態度を保つ、②相手の自分に対する理解力の程度にかかわらず、相手を理解しようと心がける、③相手の聞く能力にかかわらず、よい聞き手になる、④相手が信頼できる人物か否かにかかわらず、自分は常に信頼される人物になれるように努力する、⑤相手がいかに強制的な態度をとっても、非強制的な態度を保つというものである。

事例 5 (2009/4/21)

授業の間の休み時間、刘小研、刘小明の2人の兄弟が日本語教室に来た。

刘小明：「先生、担任の先生は修学旅行のため、10個の折鶴を折らなければならないって、どうして？うまく折れないけど。」T中学校の日本語の先生：「修学旅行のとき、記念碑のお墓参りに行く時に使うよ。教えてあげる。」そして、先生自ら折り始めた。大体20分ほどで中国人女子生徒の手伝いも受けて10個の折鶴を折り終えて、兄弟は担任の先生に渡しにいった。

また、3年生の刘小研、刘小明は卒業旅行で沖縄に行くことになった。旅行後オリジナルアルバム（先生の評価と成績付き）を作る宿題があった。兄弟2人がどうやって作るのが分からなくて、悩んでいる表情で、日本語教室へ日本語の先生に相談しに来た。「旅行中に聞いたことや、見たことをそのまま書いてもいいよ」などと日本語の先生は教えたが、結局提出せずに済んだ事例（2009/5/7）も観察された。

千羽鶴が折れなくて日本語教室に助けを求めに行くことやオリジナルアルバムを提出せずに済んだことには、日中学校文化の違いで生じた日本の中学校への不適応の結果が現れているほか、マイノリティ仲間が存在が問題をスムーズに解決する要因として作用していることも示している。ニューカマー生徒にとって、同じエスニシティや経験を有する生徒の存在そのものが適応のための貴重なリソースとなっている。彼らにとって、母語でコミュニケーションを取ることでできる友達の存在、マイノリティ仲間や同じ経験を有する仲間は大きな助けであるに違いない。

一方、「音楽や美術などの授業もあるよ。歌う時歌う、描く時描く。とてもいいですよ。リラックスできるから。」（フィールドノーツ、2009/9/14）という語りからは、中国の中学校教育では重要視されていない科目を日本の中学校では主要科目と同じように勉強することで、成績として記録されて苦しむ面も見えるが、勉強の合間にリラックスできるというメリットを感じて楽しんでいる様子も分かる。

4.2.3 課外活動をめぐって

中国の学校では主要科目の学習を中心に教育課程が構成されているのに対して、日本の学校では運動会、学芸会、修学旅行などの学校行事や給食、掃除など、いわゆる教科外の活動にも多くの時間が使われている。このような教科外活動は日本の学校文化の大きな特徴であると言える。学級活動（高校ではホームルーム活動）、児童会活動（中学・高校では生徒会活動）、クラブ活動、学校行事などの多岐にわたる内容から構成されている特別活動は、他国にあまり類を見ない（末藤、2008：45）。また、大日方（2004：223）は、課外活動について、学校の構成員としての子どもという視点、および社会へ参加する主体となるべく成長する子どもという視点からも、子どもが教科外の活動に参加することの意義

を指摘する。本調査において、ニューカマー生徒の課外活動の経験を通して形成されたそれへの参加に対する肯定的な認識が観察された。

事例 6 (2009/10/6)

10 月末の学校文化祭のため、張宇は一年生と共同で獅子舞を演じる。ラグビー部の練習も通常通りである。今日、4時からラグビー部の練習をしてから、4時半に日本語教室へ戻って獅子舞の練習をやっていた。教室に戻った時、すでに全身汗でびっしょりだった。タオルで何回も顔を拭いて休憩すると、落ち着いたようであった。まもなく、道具の獅子の頭を被って踊りの練習をし始めた。練習は5時まで続いた。5時10分ごろ日本語教室が閉まってからまたラグビー部の練習をしに行った。雨のため、6時まで教室棟の廊下で階段に沿って走る練習や腕立て伏せなどをした。

日本と中国の学校文化の大きく違うところ、即ちクラブに対するニューカマー生徒張宇の肯定的態度を窺い知ることができる。

インタビューデータ 3 (2009/7/23)

【日本と中国の学校はどこが違うと思う？】「クラブ。体を鍛えることだけでなく、精神上の成長にも役立つ。試合が多いから、チャレンジ精神やチームワーク意識などいろいろと成長させられる。中国ではこんなに本格的に練習することはないんだ。」

渡辺 (2007 : 50) は、小学校・中学校・高校時代に「何かしらの活動に、積極的に、継続して参加することが社会的スキルの獲得、向社会的行動の発達を促進する効果がある」と指摘している。渡辺が得た結果と同様に、本調査においても張宇はラグビー部のきつい練習を通して体が強健になり、挑戦力、チームワークの精神なども鍛えられることを認識し、積極的な向社会的態度を相当示していることが読み取れる。この事象から課外活動の持つ向社会的行動の発達促進の効果がニューカマー生徒達の学校生活への適応にも発揮されていると言えよう。

5 まとめ

本稿では複数の研究手法を併用し、日本の学校文化と葛藤する中国系ニューカマー生徒が受容と適応へと向かうプロセスの一端を明らかにした。ニューカマー生徒の学校文化への適応に関する調査から得たデータを M-GTA の手法を用いてコーディング及びカテゴリー化した結果、その適応促進要因は、(1)クラブなどの集団的活動への継続的な参加、(2)学習の場と方法に対する自分なりの適応術の選択、(3)マイノリティ仲間や同じ経験を有する仲間の存在、(4)人間関係における受容的な態度の重要性の認識、という4つの項目に整

理することができた。具体的には、人間関係の厳しさを経験した後に受容的な態度をとって、クラスへ溶け込もうとすること、日本語教室を居場所として求めて自らの判断で校内活動領域を在籍学級から日本語学級へ移動させること、日中の学校文化の相違により生じた問題に直面した場合、マイノリティ仲間の助けを求めること、中国の学校文化と大きく異なるクラブへの参加の意義を肯定的に認識して積極的に取り組むこと、の記述を通して、適応と不適応にかかわるニューカマー生徒達の学校生活の様々な様相を浮き彫りにした。これらの結果から、ニューカマー生徒たち自身の能動性という要因が日本の学校生活への適応を促す基礎的な要因として機能していることが明らかになった。

本研究では特に、中国系ニューカマー生徒とホスト集団との相互作用におけるニューカマー生徒の能動性に注目し、適応促進要因を考察してきた。本稿が明らかにした4つの要因は、新しく転校してきたニューカマー生徒の学校生活への適応促進に参考となるであろう。

これから更に視野を広げ、ホスト集団（学校側や日本人学生）とニューカマー生徒の双方に注目し、両者の相互作用が「学校」という場でどのように進んでいくのかを明らかにしたい。そして、ニューカマー生徒の適応の在り方の類型化、および、生徒一人一人の多様性に応じた支援の在り方について考察することを今後の課題とする。

参考文献

- 江淵一公「異文化適応のメカニズム—文化人類学的考察」『教育と医学』3、1986年、pp.910-917。
- 太田晴雄『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院、2000年。
- 大日方真史「学校における子ども参加の意義と課題—学校文化への視点を中心に—」『日本教育学会大会研究発表要項』63、2004年、pp.222-223。
- 小泉令三「転校児童の新しい学校への適応過程」『日本教育心理学』34、1986年、pp.289-296。
- 児島 明『ニューカマーの子どもと学校文化—日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィ—』勁草書房、2006年。
- 佐藤郁哉・山田真茂留『制度と文化 組織を動かす見えない力』日本経済新聞出版社、2004年。
- 佐藤郡衛「在日外国人児童・生徒の異文化適応とその教育」江淵一公編『トランスカルチュラルリズムの研究』明石書店、1998年、pp.479-497。
- 末藤美津子「特別活動の新たな課題—多文化共生をめざした取り組み—」『東京未来大学研究紀要』1、2008年、pp.45-55。
- 竹ノ下弘久『『不登校』『不就学』をめぐる意味世界 学校世界は子どもたちにどう経験されているか』宮島喬・太田晴雄編『外国人の子どもと日本の教育—不就学問題と多文化共生の課題—』東京大学出版会、2005年、pp.119-138。
- 棚田洋平「ニューカマー生徒の語りにみる『日本の学校』」『大阪大学教育学年報』14、2009年、pp.103-113。

久富善之「学校文化の構造と特質—『文化的な場』としての学校を考える」堀尾輝久ほか編『学校文化という磁場』柏書房、1996年、pp.7-41。

ロジャー・フィッシャー；スコット・ブラウン著；金山宣夫・森田正英訳『続 ハーバード交渉術—よりよい人間関係を築くために』ティビーエス・ブリタニカ、1989年。

森田京子『子どもたちのアイデンティティ・ポリティクス—ブラジル人のいる小学校のエスノグラフィー』新曜社、2007年。

山下康仁『ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリーアプローチのすべて』弘文堂、2007年。

渡辺 亮「大学生の集団活動経歴と社会的スキル及び向社会的行動との関連について—小学校・中学校・高校時代の部・スポーツクラブ活動経験をもとに—」『臨床教育心理学研究』33、2007年、p.50。